

# 【主題】 伝え合いたいと思える豊かなコミュニケーションを通した外国語学習の実現

## 【副題】 学級内のコミュニケーション活動と外部機関と連携したコミュニケーション活動

【学校・団体名】 兵庫県西宮市立安井小学校

【役職名・氏名】 教諭 吉田 恭弥

### 1 はじめに

学習指導要領では、外国語科においては「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること」、外国語活動においては「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること」が、それぞれ目標として提示され、外国語学習における「コミュニケーション」の重要性が強調された。

私は、2021年度から本校で外国語専科として3～6年生の外国語の授業を担当させていただいている。上記の目標に迫るためには、子ども達が英語の使用者として、豊かなコミュニケーションを実際に積み重ねていくことが何より大切だと考え、伝え合いたいと思えるコミュニケーションの場を作ることを目指し、日々授業作りに取り組んでいる。本論文では、そういった思いで取り組んだ実践と、それらの実践から学んだことを報告する。

### 2 実践の概要

外国語の授業の中で、子ども達が主にコミュニケーションを取る相手はクラスの仲間や教師であることを考えると、それらの相手と伝え合いたいと思えるコミュニケーションの場を設定することが重要である。一方、教科の特性を考えると、英語でないとコミュニケーションが取れない相手と英語でコミュニケーションを取るという経験を積むことも、子ども達にとって重要な学びになると考えた。そこで、様々な外部機関と連携し、そのようなコミュニケーションの場を設定することにも挑戦した。本論文では、①学級内のコミュニケーション活動と、②外部機関と連携したコミュニケーション活動に分けて実践を報告する。

### 3 具体的な実践内容

#### ①学級内のコミュニケーション活動

##### i) パフォーマンス課題

5・6年生の外国語科では、学期に1回程度、パフォーマンス課題を実施した。パフォーマンス課題は、記録に残す評価に使用する評価材であると同時に、子

ども達にとっては、その学期を通して目指す、大きな学びのゴールでもある。このパフォーマンス課題を、「テスト」として学習到達度を測るためだけに実施するのではなく、一つの大きなコミュニケーション活動としても活用することとした。そのために、各学期の学びを集約し、なおかつ子ども達が伝え合いたいと思える課題内容を考え提示した。

【表1. 2022年度パフォーマンス課題一覧】

5年生	
1学期	クラスの友達や先生に、あなたのことをより知ってもらうために、あなたのことを伝えましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。
2学期	クラスの友達や先生に、あなたにとってのヒーローを、すごさが伝わるように紹介しましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。
3学期	クラスの友達や先生に、あなたが行きたい場所を、理由も分かるように紹介しましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。
6年生	
1学期	クラスの友達や先生に、西宮市内のおすすめの場所を、魅力が伝わるように紹介しましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。
2学期	クラスの友達や先生に、これまでの人生で印象に残っている思い出を、どうして印象に残っているのかも分かるように紹介しましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。
3学期	クラスの友達や先生に、卒業を前にした今だからこそ伝えたいあなたの事やあなたの思いを伝えましょう。また、友達の発表を聞いて質問してみましょう。

パフォーマンス課題に向けての学びの手立てとしては、学級内のアイディアの共有と、一人一台端末の活用を行った。まず学級内のアイディアの共有については、発表内容を考える中で子ども達から疑問が生まれた際に、それを他の子ども達に投げかけて、どうすればよいかアイディアを募ったり、教師から発表のモデルを提示した際に、その発表をより良くするにはどの

ような内容を付け足せば良いかを学級全体で考える機会を作ったりした。教師から一方的に教えるのではなく、子ども達のアイデアを最大限に生かし、その学級ならではの学びを、1年間を通して積み重ねていくようにした。一人一台端末の活用については、Microsoft Teams の課題機能を活用した。発表内容が完成したら、子ども達は自分が話しているところを動画に撮って教師に提出し、「話すこと[発表]」の記録に残す評価には、その動画を使用することとした。動画は、締め切り日までは何度でも再提出することが可能である。本番の一発勝負ではなく、何度も挑戦して自分が納得のいく動画を提出できること、そして教師からのフィードバックを生かして再提出することが可能なことにより、子ども達にとって、課題に向けた自己調整がしやすくなると同時に、教師にとっても、より適正に評価をすることが可能になった。また、普段なかなか見ることのない自分自身が話しているところを見ることで、目線や話すスピード等、より良いコミュニケーションに向けての改善点に自分自身で気づく機会を作ることができた。

このように、パフォーマンス課題を、評価材としてだけでなく、コミュニケーション活動としても、学期の集大成の活動として位置付けることで、子ども達が学びのゴールに期待感と見通しを持って日頃のコミュニケーション活動に取り組めるようにした。そして、パフォーマンス課題に向けて、バックワードデザインで、各単元・各授業のコミュニケーション活動を組み立てていった。

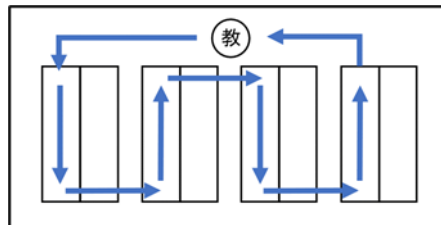
## ii) ずらしペアトーク

様々な活動を通して、上記のパフォーマンス課題に向かって学習を進めていくが、その中でもコミュニケーション活動の柱として取り組んだのが「ずらしペアトーク」である。4年間の学びを見据え、3年生から系統的に行った。

まず、子ども達の動き方としては、ペアの片方の列をずらしながらやり取りを行う。子どもの人数が奇数の時は、教師が入って調整する。また、1回目のやり取りで下の図の左側の列の子ども達が動いた場合、2回目には右側の列の子ども達が動けば、より多くの人とやり取りを行うことができる。この動きのメリットは、自動的に色々な人とやり取りができることである。色々な人とやり取りをする中で、外国語学習としての学びが深まることに加え、普段はあまり関わることの

ないクラスの人とのコミュニケーションの機会を生み出すことができる。特に、自分から色々な人に話しかけることが苦手な児童の心理的負担を減らしつつ、色々な人とやり取りをする機会を作ることができることが大きなメリットである。

【図1. ずらしペアトークにおける子ども達の動き】



次に、やり取りの内容についてである。全員が安心して取り組むことができるように、やり取りのはじめの表現については固定することにした。例えば、*What subject do you like? / I like ~.* や *What do you want for your birthday? / I want ~.* という形である。そして、そこに英語を付け足していくことをプラスアルファのタスクとして課すことにした。例えば、相槌や追加質問等である。最も難易度が高いのは、相手の話を聞いた後に、それに関連する追加質問を即興で行うことである。即興の追加質問は難易度が高いが、英語で会話をする際の難しさの大きなポイントの一つに即興性が挙げられると考えたことと、聞きたくなかったことから会話を深めていくことは、子ども達のコミュニケーションのニーズにもマッチするだろうと考え設定した。学びの手立てとしては、中間指導を丁寧に行った。活動前半での子ども達の困り感や疑問に対して、教師自身が答えたり、子ども達のアイデアをクラス全体で共有したりして後半の活動につなげることを続け、子ども達の中に会話における実用的な英語表現の引き出しを少しずつ増やしていった。それと同時に、伝えたいことの英語表現が分からない時に、完璧な英語ではなくても、知っている英語で言い換えたり、知っている英語を組み合わせたりと、自分が既に知っている英語を駆使する重要性も伝えた。私自身も、子ども達の疑問に答える際に、できるだけ子ども達が既に知っている英語表現を使えないかをよく考えて返すようにして、既習事項の活用の仕方のモデルを示すことを意識した。

このように、英語表現の引き出し自体を増やしていくことと、自分の知っている英語を駆使する力をつけていくことの両方を意識して活動することで、各単元のターゲットセンテンスだけでなく、即興力や対話を

豊かにする力も付けていくことを目指した。また、パフォーマンス課題にも、発表の後に即興のやり取りの要素を入れることで、子ども達が目指す姿をイメージしながらしペアトークのプラスアルファのタスクに挑戦できるようにした。

## ②外部機関と連携したコミュニケーション活動

### i) オンラインシステムを活用した活動

2021年度は5・6年生で、2022年度は5年生で、西宮市の友好都市である中国の紹興市にある元培小学校と zoom で繋がり、元培小学校の同じ学年の子ども達とオンライン交流を行った。主なコミュニケーション活動は、自己紹介カードの交流と本番のオンライン交流の2つである。

自己紹介カードの交流は、それぞれの学校で作成した自己紹介カードのデータを教師が電子メールで送付し合い、オンライン交流の前に子ども達が相手校の子ども達の自己紹介カードを読むという形で行った。せっかくの交流の機会を、「話す」「聞く」の活動だけではなく、「書く」「読む」の活動にも生かしたいと考えて行った活動である。子ども達は、限られたスペースの中で自分の何を元培小学校の子ども達に伝えるのかを考え、丁寧に自己紹介カードを作成していた。また、元培小学校の子ども達が作成した自己紹介カードも興味をもって読み、自分達と似ている点や違う点を見つけていた。

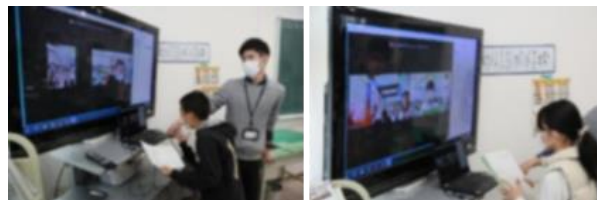
【写真1. 児童の自己紹介カード例】



オンライン交流本番では、自己紹介と相手校の子ども達への質問を行った。子ども達は、何とか伝えたい・聞きたいという思いで取り組み、交流後には、英語でコミュニケーションが取れた達成感を感じていた。また、ダンスが得意な子ども同士で即興のダンスバトルが行われるなど、リアルタイムのやり取りならではの楽しさもあった。印象的だったことは、元培小学校の子どもが簡単な日本語を使った時に安井小学校の教室で歓声が上がり、安井小学校の子どもが簡単な中国語を使った時に元培小学校の教室で歓声が上がったことである。言語は、意思疎通のツールというだけでなく、アイデンティティの一部でもあり、相手の言語に

関心をもつということは、相手を尊重することにもつながるということ、子ども達は肌で感じる事ができたと思う。また、互いに第二言語として英語を学んでいる者同士での交流だったことも、子ども達にとって良い刺激になっていた。

【写真2. オンライン交流の様子】



【表2. 児童の感想例】

- ・オンライン交流を通じて中国の紹興市のことをよく知ることができました。また元培小学校の子達は英語がものすごくペラペラでびっくりしました。自分が話すときはものすごく緊張しました。中国の子達が名探偵コナンの怪盗キッドを知っていることにも驚きました。
- ・うまく伝わったときはうれしかったし安心した。いつもの授業だと伝わらない時はちょっと日本語をしゃべれば伝わったけど、そんなことはできないから全部英語で新鮮でした。
- ・中国の小学校の人達が「こんにちは」と言ってくれたように、私も色々調べていたら中国語で話せたかもしれないと思った。
- ・中国と言えばぎょうざやチャーハンやマーボー豆腐。でも流行っている食べ物を聞いてみたら大体ハンバーガーやサンドイッチやケーキでした。中国の人はそんなに中華料理を食べないんだなと思いました。

### ii) 対面での活動

2021年度は4年生で近隣大学の留学生の方々との交流を行い、2022年度は4年生での同様の交流に加えて、6年生で兵庫県国際交流員の方々との交流を行った。いずれも、はじめに来ていただいた方々に簡単に自己紹介と出身地の紹介をしていただき、その後小グループに分かれて英語での会話を行った。会話の内容は、まず子ども達から、自己紹介と、あらかじめ考えておいた質問を行った。その後は、時間のある限りフリートークとした。

子ども達は、懸命に英語を使うことに加えて、ジェスチャーや絵を描いて見せる等のノンバーバルコミュ

ニケーションも上手く使い、コミュニケーションが取れたという達成感を感じながら交流を楽しんでいた。また、子ども達が緊張していた中で、ゲストの方々の温かい人間性にも大いに助けられ、そういった部分でも、対面の交流ならではの良さも改めて感じた。

#### 【写真3. 交流の様子】



【表3. 児童の感想例】

- ・中国や韓国の人とも、英語で話すと伝わるのが分かりました。もし日本語では通じ合えなかったとしても、英語で話すと自分も相手も分かると思いました。英語以外の言葉も習ってみたいなと思いました。
- ・留学生の方達に自分の好きな色とかフルーツを言えてよかったです。私は英語が難しいと思っていたけど、留学生の方達が分かりやすく言ってくれたので楽しめました。
- ・英語はとても大切だと思いました。それは、全世界で使えるからです。今後に生かしたいのは、英語を使って誰かの役に立ったり、色々な人と話したりしたいです。
- ・言い方が分からなくても、身振り手振りでチャレンジしたら伝わってうれしかった。自分の自己紹介もちゃんと言えて達成感があった。

## 4 成果と課題

学級内のコミュニケーション活動における一番の成果は、児童のふり返りで「友達のことをよく知れてうれしかった。」「いつもはあまり話さない人と話せて楽しかった。」等という、コミュニケーションそのものの楽しさや価値を感じられたというコメントが多く見られるようになったことである。伝え合いたくなるコミュニケーションの中身にこだわって様々な活動作りに取り組んできた中で、上記のようなコメントが増えてきたというのは、とても嬉しい成果である。

また、目指す子ども像からバックワードデザインで、パフォーマンス課題、そしてずらしペアトーク等の日頃の活動へと、各コミュニケーション活動を関連付け

て組み立てられたことで、子ども達も目の前のコミュニケーションを楽しむと同時に、長期的な学びの見通しをもって学習できるようになったことも成果である。

今後は、それらの成果を生かし、各コミュニケーション活動をより充実させていくとともに、3・4年生でも、無理なく進められるパフォーマンス課題の在り方を探っていきたい。

外部機関と連携したコミュニケーション活動は、当初のねらい通り、子ども達にとって貴重な学びや外国語学習における動機付けとなった。活動時の意欲的な姿や、前向きな感想を見ると、こういった活動を実現できて良かったと感じた。また、英語を母語としない方を含む、様々な国の方々と交流できたことで、子ども達はリングフランカとしての英語の価値も感じられたと思う。

異文化理解・人権学習としても、価値をもつ活動となった。小学生の子ども達の中にも、すでに色々な形で、それぞれの国や地域の人への思い込みが存在していることが、事前学習や活動後の感想から分かった。今回、実際に様々な国の方々と関わる中で、意外だと感じたことも多かったようである。実際に関わること、そしてそこから感じたことが重要であるということを経験し、今後の人生に生かしてほしい。

今後の課題は、学級内のコミュニケーション活動と外部機関と連携したコミュニケーション活動のつながりを、より強化していくことである。目的・場面・状況は大きく異なるが、より良いコミュニケーションを目指して、どのように思考を働かせるかという根幹の大切な部分は同じである。それぞれの活動をより効果的につなげられるように、目指す子ども像や学びの系統性をより明確に持ち、学習計画を立てていきたい。

## 5 おわりに

上記の実践を繰り返す中で、実際のコミュニケーションを積み重ねながら力をつけていくことの重要性を改めて実感した。それは、学級内のコミュニケーション活動でも外部機関と連携したコミュニケーション活動でも同じである。伝え合いたいという必然性から、新たな学びや学びの定着が生まれていった。今後も、伝え合いたいと思える豊かなコミュニケーションの場をより多く作ることを目指し、授業作りに取り組んでいく。